

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介（68） 平成 15 年 4 月 1 日

新井白石シリーズ

蘭学の出発点・新井白石の『采覧異言』(Q290-1)

新井白石（明暦 3（1657）年～享保 10（1715）年）は、上総久留里藩（千葉県）藩士正済の子として江戸に生まれました。7 歳のとき天然痘にかかり、命が危ない状態になりましたが、洋薬ユニコルンの使用によって、一命を取りとめた『折たく柴の記』に記してあります。この時に白石は洋学と最初に出会いました。天和 2（1682）年に、26 歳で大老堀田正俊に仕え、貞享 3（1686）年に 30 歳で木下順庵の門に入り、元禄 6（1693）年に、37 歳で木下順庵の推挙で甲府藩主徳川綱豊に仕えました。宝永元（1704）年、綱豊が綱吉の後継 6 代將軍家且と改名した以降も仕え、7 代將軍家継にも仕えました。

新井白石は、6 代將軍徳川家宣の命により、イタリア宣教使ジョヴァン・バッティスタ・シドチに対して取調を行ないました。シドチは法皇クレメンスナ 1 世から、鎖国中の日本におけるキリスト教の伝道の再開の任務を受け、1708（宝永 5）年に大隅屋久島に上陸しましたが、捕らえられた宣教師です。この取調の記録に基づき、『采覧異言』と『西洋紀聞』を書きました。白石はシドチへの尋問から、地理・科学・政治・宗教等数多くの情報を得て、さらにオランダ商館長から得た情報を増補・整理していきました。

『采覧異言』は 7 代將軍家継に海外事情を認識してもらうために、正徳 3（1713）年にかかれた漢文体の世界地理書です。後、8 代將軍吉宗の命により献上することとなり、吉宗の漢訳洋書輸入禁止の緩和に結びついたと言われています。『采覧異言』は、体系的地理書を意図したものであり、『西洋紀聞』よりも客観的です。全世界の地理・風俗・物産・政治情勢等について記載したもので、全体の構成は巻之 1 ヨーロッパ・巻之 2 リビア＝アフリカ・巻之 3 アジア・巻之 4 南アメリカ・巻之 5 北アメリカとなっています。表記方法では、ヨーロッパ語の表記といった工夫を行っています。また、ヨーロッパ植民地計略の実態や韃靼（タルタリア）の動静や中国・オランダと関係のある国々に関しては『采覧異言』のほうが『西洋紀聞』より詳しく記されています。『采覧異言』では、当時日本・中国で権威のあったマテオ＝リッチの『坤輿万国全図』に掲載される南方大陸のメガラニカの存在を否定するなど、当時の日本地理学書の最高峰にありました。『采覧異言』はキリスト教に論究しない地理書であり、キリスト教に関する記述のある『西洋紀聞』と異なり、広く転写され読まれました。久能文庫所蔵資料は明治 14（1881）年に刊行されたものです。

彼の影響力は、江戸期の洋学者に広く及び、杉田玄白は新井白石と荻生徂徠を 2 大先達として、大槻玄沢は『采覧異言』を一気に謄写したことから洋学にのめりこむことになりました。また林子平は『三国通覧図説』の著述にあたり、白石の『蝦夷志』・『采覧異言』を利用するとともに、オランダ商館長アーレント・ウィルレム・フェイトと対談し新知識を得ている点（『海国兵談』巻 15）にも、白石の実際にヨーロッパ人と会って調査するという学問的態度を継承しています。

【参考資料】

『新井白石の洋学と海外知識』（402.1/11）

『新井白石の史学と地理学』（121.4/117）